

まちセン雑感

客員研究員 兵頭 利樹
(宇和島市環境部美化推進課)

貴重な紙面を元研究員の腰折れ文に割いていただくのは、楽屋落ちのようで忍びなく、まずもつてお詫び申し上げます。*

この春まで勤務した(働)えひめ地域政策研究センター(以下、センター)から親会社に戻り、こちらの仕事によりやく慣れてきたところで改めて2年間を振り返っている。そして猛烈に「縁」という言葉を噛みしめている。

派遣当初、学生の頃にたまたま切り抜いた天声人語が若松進一さんの話だったことに気付いたり、数年前に九州から来た知人の希望と一緒に写真を撮った酒蔵が亀岡酒造だった、なんていう事実には不思議な縁を感じていた。

センターでの生活に慣れてくると、仕事に行く先ではもちろん、



麓川(内子町)

夜も呑みに行つた先々で少なからず不思議な縁に驚くことがしばしばだった。(松山市の「四六十」という居酒屋は、10年以上前に人に連れられて行って、初めて日本酒の旨さに感動した店だったが、地域づくり人たちの憩いの場であったそうだ。閉店したと聞き、残念に思う。)

「六次の隔たり」という理論【注①】があるが、学術的な信憑性はともかくとして、ひよつとして繋がっているのかも?と思わずにいられなかった。

しかし、そんなのある意味で当たり前とも言える。なぜなら、センター周辺の人脉は業界(?)の有名人が数知れず、その周辺は善意に満ちている。ただ、そこに在籍できた私がラッキーだっただけだ。

そうした縁によって、2年の間に2度もヨーロッパの地を踏むことになったのは、幸運で

もあつたし、やり過ぎであつたとも思う。(業務による出張ではなく自腹を切り詰め、後に経済的に困窮し、今に至っている。武器弾薬の必要性を痛感。)*

「サピア・ウオーフの仮説【注②】」というものがある。念のため強引にデフォルメして言えば、言葉が、人の物事に対する理解や行動を左右する、という考え方だ。人は経験からしかモノが言えない、と私は思うし、S・W仮説には、抗いたいけど現実としてあるよねえ、となんとなく有効性を感じている。

センターに派遣された当初、私には地域づくりに関する経験も知識もないばかりか、言葉も持ち合わせていなかった。「まちづくり」って何?って感じで。経験に乏しいのは今も変わらずだが、それでもこの2年間で地域づくりの語彙が広がり、それによって行動も含めほんやりと見えてきたものがあるような気がする。

センターの周りには実にさまざまな「実践者」が跋扈している。そうした人たちとの関わりのなかで、私は少しずつ言葉を



御祓地区 (五十崎町)

習得していった。

内子で実践者の声を聞き、その縁で訪れることになったスイスで「近自然」という言葉を知り、高知に近自然河川工法の大家を訪ね、大分県大山町で元「荒夢員」の経営手腕に驚き、沖縄で厳しい現実の中でもフレンドリーな人々に出会い、由布院で世代を越えて受け継がれる確固たる理念に感心した。そして、まちづくりの理念とさまざまな手法が、昭和50年代にはすでに愛媛県内の各地でブレイクしていたことを知るようになるのである。久万町、五十崎町、内子町、双海町…。県内各地はもちろんだが、地元宇和島や津島町のことも知らなかったことを恥じる。

振り返りに戻ったか？ いやいや、踏むべき巡礼の路だったのだろう。そして再び辿り着いた五十崎藩の師にそそのかされて(つ)、フランスという国の豊かさを見ることもできた。

* * *

この2年間に訪れた場所で、私は本来の意味で「観光」のエッセンスを味わえたと思う。教会でジエームズ・ブラウンの説教を聴いたわけではないが、行く先々で光を見たと思っっている。それが全てで光ではもちろんない。ただ少なくともそこで地道に活動する人と出会い、話を聞けたときに、来て良かったと思えるし、また来ようと思う。

さて、これから宇和島市を訪れる人に光を見てもらえるようにしなければ。幸い、これまた縁のあった先輩方のおかげで構造改革特区による「どぶろく造り」という目標ができています。

また、行政職員として、などと振りかぶるとろくな事がないので、個人的に興味があるのは、広松伝という人物のことだ。柳川の掘割を蘇らせた広松伝さんのことを知り、逢ってみたかったと思う。幸いにも、本人に逢ったことのある人が身近に何人かいる。広松さんの思いを、改めて考えてみたい。

* * *

センターでは同僚にも恵まれた。愛媛の東端自治体職員と南端自治体職員が同時に在籍したのは、なんだか楽しかった。

とはいえ、良くも悪くもたったの2年間で、これからの修行のほうが長い。在籍期間中に出会った皆さん、これからもよ



大平の棚田 (津島町)

ろしくお願いします。

【注】

①：社会学の「Six Degrees of Separation」理論。全く知らないもの同士でも、実はその間に6人の人間が介在すれば知り合いになれるという考え方。1960年代後半に提唱された。

②：言語学の「Sapir-Whorf hypothesis」。ある言語にあるものを指す言葉がなければ、それはその言語の話し手の思考や世界観の一部にはならず、ある意味では知覚されない。人が話す言葉と、人の物事の理解のしかたやふるまい方には密接な関係があるとする考え方。例えば、「肩こり」という言葉を持たなければ肩がこる現象は知覚されない。ただし、この是非については意見が分かれている。